

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 9日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720253

研究課題名（和文） 19世紀アイヌ統治とアイヌ観

研究課題名（英文） Research on the Ainu Policies and view of Ainu in 19th century

研究代表者

檜皮 瑞樹（HIWA MIZUKI）

早稲田大学・大学史資料センター・助教

研究者番号：00454124

研究成果の概要（和文）：

本研究は、19世紀におけるアイヌ統治政策を対象とし、統治政策の frontline に位置した実務官吏の思想・行動を分析することで、当該期のアイヌ同化政策の根幹には仁政的ヒューマニズムが存在したことを明らかにした。また、近世的華夷秩序意識からの逸脱がアイヌ統治政策にも強く影響したこと、近代的国民国家への転換に際しては、19世紀特有の華夷意識が存在したことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This research proved that “Jinsei” humanism existed in the basis of the Ainu government policy in the 19th century, through the analyzing the business government official's located in the front of a government policy thought and action. It proved that the deviation from the Chinese hegemony at pre-modern Japan influenced also for an Ainu government policy, and that the Chinese hegemony peculiar to the 19th century existed in the process of conversion to a modern nation-state.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
22年度	600,000	180,000	780,000
23年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本近世史・日本近代史・アイヌ史・マイノリティ研究

1. 研究開始当初の背景

- (1) アイヌ統治史研究は、19世紀のアイヌ支配に関して「支配権力による収奪・暴力」というステレオタイプな分析視角にとどまっており、アイヌ同化政策を生み出した政治的暴力についての内在的検討は行われて来なかった。
- (2) 既存研究における分析対象は、幕閣など

の幕府中枢に偏っており、現地統治機構である箱館奉行や奉行所官吏などの実務官吏に関する研究はほとんど行われていなかった。

- (3) 蝦夷地・アイヌ統治における統治イデオロギーや、当該期の周縁的領域の国家的位置付けに関しては、蝦夷地やアイヌに即した研究に関して未だに手付かずな分野が

多く存在した。

2. 研究の目的

- (1) 本研究では、19世紀に蝦夷地・アイヌ支配における統治イデオロギーの変容や、幕藩制国家体制内における「異域」の位置付けの変化について考察することを目的とした。
- (2) 具体的には、箱館奉行所吏員のアイヌ観・蝦夷地認識を分析対象とし、官吏個人の思想や知見とともに、統治集団として持った支配イデオロギーやアイヌ観・蝦夷地観の特質を解明することを目的とした。

3. 研究の方法

- (1) 19世紀におけるアイヌ統治政策の契機となった1954年(安政元年)の蝦夷地調査に着目し、調査参加者に関わる資料収集を行った。
- (2) 19世紀以降に蝦夷地を訪問した旅行者・調査者・商人等に関係する史料、彼らが蝦夷地やアイヌに関して残した記録(日記類)を調査した。
- (3) 19世紀に蝦夷地・アイヌの統治機構であった箱館奉行所に関する歴史資料(奉行や官吏の私的な史料も含む)に関する調査を行った。
- (4) アイヌ統治政策の実行者であった箱館奉行所吏員のアイヌ観とアイヌ統治政策との関係、その根底に存在した仁政的ヒューマニズムに注目し、仁政的ヒューマニズムとアイヌ同化政策との関係を検討した。

4. 研究成果

- (1) 19世紀に蝦夷地に私的・公的に渡海し、その後幕府や開拓使の官吏として蝦夷地・アイヌ統治政策に関わった以下の人物に着目し、彼らに関係する資料調査を行った。
 - ① 松浦武四郎；弘化年間より個人で蝦夷地へ渡海・調査を行う。安政期には箱館奉行所雇いとして、蝦夷地の地理やアイヌ統治に関する実地調査を行が数年で辞任。明治維新以後は開拓使判官に任命されるが、開拓使の方針を批判して僅か1年で辞職。既存研究においてはアイヌへの「良き理解者」として評価されている。
 - ② 岡本監輔；慶応期より個人で北蝦夷地(カラフト島)へ渡海、維新後は開拓使の官吏となる。急進的な蝦夷地開発・防備論を主張し、漸進政策をとる開拓使長官黒田清隆と対立して辞職する。
 - ③ 松本十郎；庄内藩士として幕末期に蝦夷地統治に関わる。維新後は開拓使官吏とし

て蝦夷地・アイヌ統治に従事するが、カラフトアイヌの強制移住政策を批判、開拓使長官黒田清隆と対立して開拓使を辞職する。

④ 安政元年蝦夷地調査隊；安政元年に蝦夷地の大規模調査のために派遣された調査隊。蝦夷地でのアイヌとの直接の接触、仁政的為政者としての振る舞いを行う。参加者のほとんどが箱館奉行所の官吏として、安政期以後の蝦夷地・アイヌ統治に従事した。

- (2) 近世におけるアイヌ同化政策の根底には、儒教的世界観＝華夷的世界秩序が強く存在したこと、そのためアイヌ帰俗政策においても仁政的ヒューマニズムが下支えしたことを明らかにした。
- (3) 従来、アイヌ同化政策に批判的であったと評価されてきた松浦武四郎や松本十郎といった官吏の思想を分析し、箱館奉行所官吏のアイヌ観や仁政的ヒューマニズムとの関係性・類似性に着目した。
- (4) 仁政的同化政策は、同化政策を推進した幕府官吏のみならず、従来同化政策に批判的であったとされる松浦武四郎においても共有されていたことを明らかにした。
- (5) 松浦武四郎や、同じく開拓使による樺太アイヌの強制移住政策を批判した松本十郎の思想を分析し、彼らはアイヌの「意向」を無視した同化政策を批判したのであり、「アイヌの主体的な同化」に関しては理想的であると認識していたこと、アイヌの強制移住に関しても移住場所に関するアイヌの意向が重要視され、アイヌの意向を無視した点に批判の重点が置かれたことを明らかにした。
- (6) 箱館奉行所支配における蝦夷地やアイヌ民族の位置付けが、19世紀半ばにおいて近世幕藩体制における「異域」という位置付けから幕藩体制内へと明確に包摂されること、その過程においてアイヌ民族の「御百姓化」が目指されたことに着目し、19世紀におけるアイヌ同化政策とは、アイヌの「御百姓」化であり、仁政的ヒューマニズムがその背景に存在したことが明らかにした。
- (7) 開拓使支配においては、当初は幕藩体制的枠組みの継承が試みられたが、黒田清隆長官時代には、「平等原則」のもと近世的なアイヌ民族への「撫育」といった保護政策は全面的に否定されたことを明らかにし、この変化とは国民国家的な意味での内包化であり、幕藩体制的な内包化とは大きく性格を異にするものであると位置付けた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

1. 檜皮瑞樹、「書評：宮武公夫著『海を渡ったアイヌ—先住民展示と二つの博覧会—』、『日本歴史』、査読無、760 巻、2011 年、(pp. 120～122)
2. 檜皮瑞樹、「2011 年度歴史学研究会大会近代史部会コメント」、『歴史学研究』、査読無、885 号、2011 年、(pp. 110～112)

[学会発表] (計 1 件)

1. 檜皮瑞樹、「コメント—アイヌ史研究の立場から」、2011 年度歴史学研究会大会・近代史部会「植民地認識を問い直す—継続する「戦争」、終わらない「分断」—」、2011 年 5 月、青山学院大学

[図書] (計 2 件)

1. 歴史学研究会編 檜皮瑞樹、「はじめに」、『「韓国」併合 100 年と日本の歴史学—「植民地責任」論の視座から (シリーズ歴史学の現在)』、青木書店、2011 年、(pp. ～)
2. 須田努編 檜皮瑞樹、「一九世紀民衆の対外観—夷狄意識と救世主像—」、『逸脱する百姓—菅野八郎から見る一九世紀の社会』、東京堂出版、2010 年、

[産業財産権]

○出願状況 (計 1 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

檜皮 瑞樹 (HIWA MIUZKI)
早稲田大学・大学史資料センター・助教
研究者番号：22720253

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

